

部分ベクトル空間

定義 0.1 (部分ベクトル空間). V をベクトル空間とする. V の空でない部分集合 W が**部分ベクトル空間**であるとは,

- (i) $u, v \in W \implies u + v \in W$
- (ii) $a \in F, u \in W \implies au \in W$

をみたすときをいう. それぞれ V の加法とスカラー倍について閉じているという. 部分ベクトル空間を部分空間ともいう.

定理 0.2. 部分ベクトル空間自身もベクトル空間である.

定理 0.3. ベクトル空間 V の空でない部分集合 W が部分ベクトル空間であるためには, V の加法とスカラー倍について閉じていることが必要十分である. すなわち

$$a, b \in F, u, v \in W \implies au + bv \in W \quad (1)$$

をみたす.

Proof. W を部分ベクトル空間とする. スカラー $a, b \in F$ とベクトル $u, v \in W$ に対して, (ii) より $au, bv \in W$ が成り立つ. (i) より $au + bv \in W$ がわかる.

逆に, (1) が成り立つような V の部分集合 W が部分ベクトル空間となることを示そう. スカラーを $a = b = 1$ と置くと, (1) より $u, v \in W$ のとき $u + v \in W$ が成り立つ. また $b = 0$ とすると, $au + 0v = au + 0 = au \in W$ より, $a \in F, u \in W$ のとき $au \in W$ が成り立つ. したがって, W は V の部分ベクトル空間となる. \square

部分集合 $W \subset V$ が部分ベクトル空間かどうか確かめるには, (1) を確認すればよい.

命題 0.4. W_1, W_2 が V の部分ベクトル空間とする. このとき, $W_1 \cap W_2$ も V の部分ベクトル空間となる.

より一般に次が成り立つ.

命題 0.5. W_1, W_2, \dots, W_n が V の部分ベクトル空間とする. このとき, $W_1 \cap W_2 \cap \dots \cap W_n$ も V の部分ベクトル空間となる.

Proof. $a, b \in F, u, v \in W_1 \cap W_2 \cap \dots \cap W_n$ に対して, $u, v \in W_k$ である. 各 W_k は V の部分空間であるので,

$$au + bv \in W_k \quad (k = 1, \dots, n)$$

が成り立つ. したがって $au + bv \in W_1 \cap W_2 \cap \dots \cap W_n$ が成り立つ. \square

ベクトル空間 \mathbb{C}^3 において

$$W_1 = \left\{ \begin{bmatrix} v_1 \\ v_2 \\ v_3 \end{bmatrix} \mid v_1 + v_2 + v_3 = 0 \right\}$$

$$W_2 = \left\{ \begin{bmatrix} v_1 \\ v_2 \\ v_3 \end{bmatrix} \mid v_1 + v_2 + iv_3 = 0 \right\}$$

はともに \mathbb{C}^3 の部分空間である. いま $W = W_1 \cap W_2$ とすると, W は定

理 0.5 によって \mathbb{C}^3 の部分空間である. $\mathbf{v} = \begin{bmatrix} v_1 \\ v_2 \\ v_3 \end{bmatrix} \in W$ であるためには

$$v_1 + v_2 + v_3 = 0$$

$$v_1 + v_2 + iv_3 = 0$$

が成り立つことが必要十分である. 上の式から下の式を引けば $(1-i)v_3 = 0$ となるから $v_3 = 0$ である. すると $v_2 = -v_1$ となるから $v_1 = x$ と置くことにより,

$$W = \left\{ \begin{bmatrix} x \\ -x \\ 0 \end{bmatrix} \mid x \in \mathbb{C} \right\}$$

となることがわかる.

部分空間の共通部分はまた部分空間となったが, 部分空間の和集合は

一般には部分空間とはならない. 先ほどの例において, $\mathbf{a} = \begin{bmatrix} 1 \\ 0 \\ -1 \end{bmatrix}, \mathbf{b} =$

$\begin{bmatrix} 0 \\ 1 \\ i \end{bmatrix}$ とすると, $\mathbf{a} \in W_1, \mathbf{b} \in W_2$ であるが,

$$\mathbf{a} + \mathbf{b} = \begin{bmatrix} 1 \\ 1 \\ i-1 \end{bmatrix} \notin W_1 \cup W_2$$

である.

1 次結合で張られる空間

F 上のベクトル空間 V の有限個のベクトルの集合 $S = \{\mathbf{v}_1, \mathbf{v}_2, \dots, \mathbf{v}_n\}$ が与えられたとする. これらのベクトルの 1 次結合で表されるようなベクトルの全体, すなわち

$$\{a_1\mathbf{v}_1 + a_2\mathbf{v}_2 + \dots + a_n\mathbf{v}_n \mid a_i \in F, \mathbf{v}_i \in S\}$$

は V の部分空間となることがわかる.

この部分空間を S によって**張られる** (生成される) 部分空間といって,

$$\langle S \rangle = \text{span}(S) = \{a_1\mathbf{v}_1 + a_2\mathbf{v}_2 + \dots + a_n\mathbf{v}_n \mid a_i \in F, \mathbf{v}_i \in S\}$$

と書くことにする. $\langle S \rangle = \langle \mathbf{v}_1, \mathbf{v}_2, \dots, \mathbf{v}_n \rangle$ とも表す.

張られる空間の例として, \mathbb{E}^3 において $\vec{a} = \overrightarrow{OA}, \vec{b} = \overrightarrow{OB}$ とし, 三点 O, A, B は同一直線上にないものとする. このとき $\text{span}\{\vec{a}, \vec{b}\}$ がどのような集合か考える. \vec{a} と \vec{b} の 1 次結合で表されるベクトル $\vec{p} = \overrightarrow{OP}$ を考える.

$$\vec{p} = p_1\vec{a} + p_2\vec{b}$$

とし, $p_1\vec{a} = \overrightarrow{OA'}, p_2\vec{b} = \overrightarrow{OB'}$ とすると, A' は直線 OA 上にあり, B' は直線 OB 上にあって, P は並行四辺形 $OA'PB'$ の頂点なので, O, A', P, B' は同一平面上にあることがわかる. その平面は O, A, B が定める平面である. 逆に三点 O, A, B が定める平面上の任意の点を P とすると, \overrightarrow{OP} は \vec{a} と \vec{b} の 1 次結合で表される. したがって $\text{span}\{\vec{a}, \vec{b}\}$ は O, A, B によって定まる平面とそれに平行なベクトル全体である.

次の例として, $\mathbf{a} = \begin{bmatrix} 1 \\ i \\ 0 \end{bmatrix}, \mathbf{b} = \begin{bmatrix} 0 \\ -1 \\ i \end{bmatrix}$ を \mathbb{C}^3 のベクトルとする.

$\text{span}\{\mathbf{a}, \mathbf{b}\}$ がどのような集合か考える. $\mathbf{x} = \begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{bmatrix} \in \text{span}\{\mathbf{a}, \mathbf{b}\}$ とする.

$$\mathbf{x} = c_1 \mathbf{a} + c_2 \mathbf{b} = \begin{bmatrix} c_1 \\ c_1 i \\ 0 \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} 0 \\ -c_2 \\ c_2 i \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} c_1 \\ c_1 i - c_2 \\ c_2 i \end{bmatrix}$$

となるから $x_1 = c_1, x_2 = c_1 i - c_2, x_3 = c_2 i$ となる. したがって x_1, x_2, x_3 は

$$x_1 + ix_2 + x_3 = 0 \quad (2)$$

をみたしている. 逆に (2) をみたす x_1, x_2, x_3 を成分とするベクトル

$$\mathbf{x} = \begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{bmatrix} \text{ を考える.}$$

$$x_1 + ix_2 + x_3 = 0 \implies x_2 = ix_1 + ix_3$$

となっているので,

$$\mathbf{x} = \begin{bmatrix} x_1 \\ ix_1 + ix_3 \\ x_3 \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} x_1 \\ ix_1 \\ 0 \end{bmatrix} + \begin{bmatrix} 0 \\ ix_3 \\ x_3 \end{bmatrix} = x_1 \begin{bmatrix} 1 \\ i \\ 0 \end{bmatrix} + x_3 \begin{bmatrix} 0 \\ -1 \\ i \end{bmatrix} = x_1 \mathbf{a} - ix_3 \mathbf{b}$$

したがって $\mathbf{x} \in \text{span}\{\mathbf{a}, \mathbf{b}\}$ がわかる. 以上より

$$\text{span}\{\mathbf{a}, \mathbf{b}\} = \left\{ \begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{bmatrix} \mid x_1 + ix_2 + x_3 = 0 \right\}.$$

ベクトル空間 V の部分空間 W_1, W_2, \dots, W_n に対してそれらの和集合 $W_1 \cup W_2 \cup \dots \cup W_n$ は V の部分空間にはならない. しかし和集合によって張られる $\text{span}(W_1 \cup W_2 \cup \dots \cup W_n)$ は V の部分空間である. これを $W_1 + W_2 + \dots + W_n$ と書いて和 (または和空間) という.

定義 0.6. W と W' を V の部分空間とする. ベクトル空間の和 $W + W'$ を次で定める.

$$W + W' = \{\mathbf{w} + \mathbf{w}' \mid \mathbf{w} \in W, \mathbf{w}' \in W'\}$$

より一般に, ベクトル空間 V の部分空間を集めた $\{W_i \mid i \in K\}$ に対して和 $\sum_{i \in K} W_i$ を次で定める.

$$\sum_{i \in K} W_i = \left\{ \mathbf{w}_1 + \mathbf{w}_2 + \dots + \mathbf{w}_n \mid \mathbf{w}_j \in \bigcup_{i \in K} W_i \right\}$$

\mathbf{v} が $W_1 + \dots + W_n$ に属しているベクトルとする. \mathbf{v} は $W_1 \cup W_2 \cup \dots \cup W_n$ に属するいくつかのベクトルの 1 次結合で表される.

$$\mathbf{v} = a_1 \mathbf{v}_1 + a_2 \mathbf{v}_2 + \dots + a_r \mathbf{v}_r$$

各 $\mathbf{v}_1, \dots, \mathbf{v}_r$ は W_1, \dots, W_n のどれかに属している. 特に W_1 に属しているものを $\tilde{\mathbf{v}}_1, \dots, \tilde{\mathbf{v}}_p$ とすると,

$$\mathbf{w}_1 = \tilde{\mathbf{v}}_1 + \tilde{\mathbf{v}}_2 + \dots + \tilde{\mathbf{v}}_p$$

とすると $\mathbf{w}_1 \in W_1$ となる. 同様にして $\mathbf{w}_2 \in W_2, \dots, \mathbf{w}_n \in W_n$ を作ると

$$\mathbf{v} = \mathbf{w}_1 + \mathbf{w}_2 + \dots + \mathbf{w}_n$$

と W_1, \dots, W_n のベクトルの和となっている.

$\boldsymbol{v} \in W_1 + \cdots + W_n$ を W_1, \cdots, W_n のベクトルの和

$$\boldsymbol{v} = \boldsymbol{w}_1 + \boldsymbol{w}_2 + \cdots + \boldsymbol{w}_n$$

で表すとき表し方は一意的ではない. $\boldsymbol{w}_1, \boldsymbol{w}_2, \cdots, \boldsymbol{w}_n$ とは異なる $\boldsymbol{w}'_1 \in W_1, \boldsymbol{w}'_2 \in W_2, \cdots, \boldsymbol{w}'_n \in W_n$ が存在して,

$$\boldsymbol{v} = \boldsymbol{w}'_1 + \boldsymbol{w}'_2 + \cdots + \boldsymbol{w}'_n$$

と表せる場合がある.

\mathbb{C}^3 の部分空間 W_1, W_2 を考える.

$$W_1 = \left\{ \boldsymbol{x} = \begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{bmatrix} \mid x_1 + x_2 + x_3 = 0 \right\}$$

$$W_2 = \left\{ \boldsymbol{x} = \begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{bmatrix} \mid x_1 + x_2 - x_3 = 0 \right\}$$

\mathbb{C}^3 の任意のベクトル $\boldsymbol{x} = \begin{bmatrix} x_1 \\ x_2 \\ x_3 \end{bmatrix}$ に対して,

$$\boldsymbol{x}_1 = \begin{bmatrix} x_1 \\ -(x_1 - x_2 + x_3)/2 \\ -(x_1 + x_2 - x_3)/2 \end{bmatrix}, \quad \boldsymbol{x}_2 = \begin{bmatrix} 0 \\ (x_1 + x_2 + x_3)/2 \\ (x_1 + x_2 + x_3)/2 \end{bmatrix}$$

とおくと $\boldsymbol{x}_1 \in W_1, \boldsymbol{x}_2 \in W_2$ であってしかも

$$\boldsymbol{x}_1 + \boldsymbol{x}_2 = \boldsymbol{x}$$

となるから \mathbb{C}^3 の任意のベクトルは $W_1 + W_2$ に属していて

$$W_1 + W_2 = \mathbb{C}^3$$

である. $\boldsymbol{x} = \begin{bmatrix} 2 \\ 2 \\ 2 \end{bmatrix}$ に対して,

$$\boldsymbol{x}_1 = \begin{bmatrix} 2 \\ -1 \\ -1 \end{bmatrix}, \boldsymbol{x}'_1 = \begin{bmatrix} 4 \\ -3 \\ -1 \end{bmatrix}, \boldsymbol{x}_2 = \begin{bmatrix} 0 \\ 3 \\ 3 \end{bmatrix}, \boldsymbol{x}'_2 = \begin{bmatrix} -2 \\ 5 \\ 3 \end{bmatrix}$$

$\boldsymbol{x}_1, \boldsymbol{x}'_1 \in W_1$ かつ $\boldsymbol{x}_2, \boldsymbol{x}'_2 \in W_2$ であり,

$$\boldsymbol{x} = \boldsymbol{x}_1 + \boldsymbol{x}_2 = \boldsymbol{x}'_1 + \boldsymbol{x}'_2$$

となる.

ベクトル空間 V の部分空間 W_1, W_2, \cdots, W_n の和 $W_1 + W_2 + \cdots + W_n$ においてベクトル $\boldsymbol{w} \in \sum W_i$ を W_i のベクトルの和で表すやり方が一意的であるとき, 和 $W_1 + W_2 + \cdots + W_n$ は直和であるという.

定理 0.7. V をベクトル空間とし, W_1, W_2, \dots, W_r をそれぞれ r 個の V の部分空間とする. このとき, 次の (i), (ii), (iii) は同値となる.

(i) $W = W_1 + W_2 + \dots + W_r$ が直和である.

(ii) $w_i \in W_i$ に対して,

$$w_1 + w_2 + \dots + w_r = \mathbf{0} \implies w_1 = w_2 = \dots = w_r = \mathbf{0}$$

(iii) $(W_1 + \dots + W_{i-1} + W_{i+1} + \dots + W_r) \cap W_i = \{\mathbf{0}\}$ が $i = 1, \dots, r$ で成り立つ.

Proof. (i) \Rightarrow (ii) を示す. $W = W_1 + W_2 + \dots + W_r$ が直和であるとする. $w_i \in W_i$ に対して, $w_1 + w_2 + \dots + w_r = \mathbf{0}$ となったとする. ここで $\mathbf{0} \in W$ であって, $\mathbf{0} = \underbrace{\mathbf{0} + \mathbf{0} + \dots + \mathbf{0}}_r$ かつ $\mathbf{0} \in W_i$ でもある. ベクトル $\mathbf{0} \in W$ を部分空間のベクトルの和で表すやり方が一意的であることから, $w_1 = w_2 = \dots = w_r = \mathbf{0}$ が成り立つ.

(ii) \Rightarrow (iii) を示す. $i = 1, \dots, r$ を動く i を一つ固定して,

$$v \in (W_1 + \dots + W_{i-1} + W_{i+1} + \dots + W_r) \cap W_i$$

をとる. $v \in W_1 + \dots + W_{i-1} + W_{i+1} + \dots + W_r$ であるから, $k = 1, \dots, i-1, i+1, \dots, r$ に対して, $w_k \in W_k$ をとって,

$$v = w_1 + \dots + w_{i-1} + w_{i+1} + \dots + w_r$$

を得る. また $v \in W_i$ であるから $-v \in W_i$ であって $-v = w_i$ とおくと

$$w_1 + \dots + w_i + \dots + w_r = \mathbf{0}$$

を得る. したがって, (ii) より $w_1 = \dots = w_r = \mathbf{0}$. 特に $v = -w_i = \mathbf{0}$ であるので (iii) が成り立つ.

(iii) \Rightarrow (i) を示す. W の任意のベクトル v に対して,

$$v = w_1 + \dots + w_r = w'_1 + \dots + w'_r \quad (3)$$

と書けるとする. ただし $w_i, w'_i \in W_i, i = 1, \dots, r$ である. $v_i = w_i - w'_i$ とおくと $v_i \in W_i$ であって (3) より,

$$v_1 + \dots + v_r = \mathbf{0}$$

となる. したがって任意の i に対して

$$v_i = -v_1 - \dots - v_{i-1} - v_{i+1} - \dots - v_r$$

となる. 左辺は $v_i \in W_i$ となる. 右辺は $W_1 + \dots + W_{i-1} + W_{i+1} + \dots + W_r$ に属するベクトルである. $v_i \in (W_1 + \dots + W_{i-1} + W_{i+1} + \dots + W_r) \cap W_i$ となり, (iii) より $v_i = \mathbf{0}$ を得る. よって $w_i - w'_i = \mathbf{0}$ が任意の i に対して成り立つ. すなわち, W のベクトルを W_1, W_2, \dots, W_r のベクトルの和で表す表し方は一意的であることが示されたから

$$W = W_1 + \dots + W_r$$

は直和である. □

系 0.8. ベクトル空間 V の部分空間 W が, 二つの部分空間 W_1, W_2 の直和であるためには,

$$W = W_1 + W_2 \text{ かつ } W_1 \cap W_2 = \{\mathbf{0}\}$$

が成り立つときであり, $W = W_1 + W_2$ で表す.